

人間コミュニケーションに関する断章

Fragments on Human Communication

岩 本 一 善

キーワード：コミュニケーション、言語、意味

幸いにも筆者は1996年以来これまで、本学をはじめとしたいくつかの短大・大学でコミュニケーションについて講じる機会を与えられてきた。また毎回の授業が終わった後には、とりわけ熱心な受講生諸兄姉らと人間のコミュニケーション一般について、問答とも議論ともつかない、とりとめのない談義を取り交わすという僥倖に恵まれることも少なからずあった。(蛇足ながら、本学の学生諸君とはこれまでのところ、そのような経験は皆無である…。残念!) そうしたとりとめのないやりとりの中から筆者は、受講生諸兄姉が人間のコミュニケーションに関して抱く思いや問いに、いくつかのある共通した輪郭のようなものがあることに気付かされた。そしてまた、そのような共通した輪郭には、人間コミュニケーションの理論を専攻する筆者自身の疑問や所感とも重なるものが少なからずあることもわかってきた。

以下は、そうした共通の輪郭から抽出した「断章」である。したがって、以下に上げるそれぞれの「断章」を、一言一句違わず文字通りそのようなものとして発した個人を特定することはできない一方で、これらの「断章」が専ら筆者一人の着想によるものとは言えないことも断っておかなければならない。

断章 1

コミュニケーションとは、自分と、コミュニケーションの対象となる他人とがいて初めて成立する行為ではあるが、実はきわめて個人的な行為なのではないか。なぜなら、それが成立したのか否かは、自分自身の判断に依拠するしかないのだから…。

frag. 1

Communication is established by the passing of information from a communicator to a communicatee. However, there seems to be a rather more personal dimension to interpersonal communication; whether or not the information was properly passed to the communicatee is decided solely by the communicator.

拙稿「コミュニケーション論講義（１）」¹⁾でも指摘しておいたとおり、ハーバーマス（Habermas, J.）は、「わたしがコミュニケーション的行為と言うのは、参加している行為者の行為計画が、自己中心的な成果の計算を経過してではなく、了解という行為を経て調整される場合」であり、「了解とは、言語能力と行為能力を備えた主体の間で一致が達成される過程である」²⁾としていた。その当否はここでは措くとして、この指摘に凄みがあるのは、「了解」とは「一致が達成される過程」であるとしていることにあるように思う。「達成されること」ではなく「過程」であること。確かに、コミュニケーションが「成立したこと」は、少なくともコミュニケーションの当事者には確かめようがない。自分が感じ、考えたことを、相手も同じように感じ、考えているはずだということは、かなり高い公算でそう信じることはできる。逆に、そうでなければ通常の社会生活がまったく成立しなくなってしまうだろう。しかし、疑いの余地なくそのことを確信すること、そのようなことは人間には不可能なことである。コミュニケーションの当事者同士がいくらお互いに理解し合っていることを確認しようと試みたところで、この者たちの心の裡を読み取れるという、いわば神のような能力を持った第三者がそのことを保証してくれるのでもない限り、そのような作業は無限に反復されていくしかない。だからこそ、コミュニケーションは「結果」ではなく「過程」でなければならない。卑近な例ではあるが、その証拠に私たちは、（あぁ、この人とはもう一切話し合いの余地はないな）と感じたとき、「もういい、わかったから、もういい」などという。「わかった」という結果は、それ以上のコミュニケーションの拒絶である。一方、コミュニケーションを途切れることなく続けていきたいと感じたときには、相手の話をもっと聞きたい、自分の話をもっとこの人に聞いてもらいたい、そう思うのではないか。このように、人間コミュニケーションは自分と相手を巻き込んだ、ゴールのない循環過程であるといえるだろう。

しかし同時に、ではその循環過程が円滑に機能しているのかということについての判断は、最終的には自分一人の判断で下すしかない。相手に自分の意図が正しく伝わったのかをいくら問い質してみたところで、それこそ諄いほどに念を押してみたところで、100%の確証は得られないままである。そしてそれは、自分は相手の意図を正しく理解したのだということをその人に伝えたいという場合についても同様である。「理解した」ということを理解してもらっているのか、このことを確かめる術はない。人間コミュニケーションには、少なくとも自分と相手という複数の参加者が必須であるのに、その当否の判断については、疑いの余地のない確信は得られないまま、自分という「個」が負わなければならない。そういう点からすると、コミュニケーションとはきわめて個人的な行為でもあるのではないかという直感は、ある意味で正しいもののように思う。

断章 2

コミュニケーションにおいて人は妥協している。それは、「相手の理解力に多くを期待しない」という意味での妥協ではない。自己の相手に対する「さぐり」の信憑性についての妥協である。

frag. 2

When people communicate, they compromise. They do not compromise in terms of expectation

of understanding, but in terms of believability when an individual is figuratively “beating around the bush” before reaching the point.

断章2は断章1のヴァリエーションのようなものである。自分と相手との間にコミュニケーションが成立しているのか否か、その成否について確信を持つことはできない。しかし実際には私たちは、それでもどうやらお互いになんとか意思の疎通が図れているようだということを信じて日常生活を送っている。このとき、意思の疎通が図れていることを明確にしようとするならば、断章1であげた無限ループに陥ってしまう。ここで、「ひょっとしたらこの人は私の言うことなんかサッパリわかっていないんじゃないだろうか？」という疑念がわきあがることも確かに珍しいことではない。ただそれよりもむしろ、「どうにもこいつの考えが読めない…」という戸惑いのほうが頻度は高いような気がする。個人差にもよるのだろうが、少なくとも筆者の場合はそうである。

いずれにしても、そこで私たちは、一片の疑いの余地もない確証を得るなどという不可能なことを追求することはやめにして、適当なところで妥協することになる。何について？ 「どうせ他者は自分のことなど完全には理解してくれるわけがない」ということについてではない。「相手は自分のメッセージをこのように理解しているのではないか？」という予想について、である。そして実際のコミュニケーションにおいては、コールに対するレスポンスというような、たった一度のサイクルでコミュニケーションが終了してしまうことなどまれだろうから、この、お互いが相手の本意を予想し合うという一連の「さぐり合い」が進行していくことになる…。一度このような妥協に気付いてしまうと、それは心になんとも嫌な感触を残すことになる。だから私たちは通常、このような妥協や諦念に気付かないふりをして日常をやり過ごす。

それはあまりに悲観的なコミュニケーション観ではないのかと思われるかもしれない。ただ、では自分がある意図を込めて発したメッセージから、相手も自分の意図したものと同一意味を読み取ってくれる保証などどこにもないとする悲観的なコミュニケーション観と、同じ種としてのヒト同士であれば生理学的・生物学的条件に即した、または同じ言語の話者であればその言語の用法に即した、それぞれある程度まで普遍的なコミュニケーションの規則が存在するはずだろうから、自分の理解と相手の理解との間に大きな齟齬など生じるはずがないとする楽観的なコミュニケーション観、そのどちらが唯我論的(solipsism)なのだろうか。どうも、どちらも大きな違いはないように思える。そして筆者の担当するコミュニケーション論の受講生のなかでも特に関心の高い諸姉には、偶然にもなぜか前者の立場をとる人が多かった。

断章3

相手の気持ちや反応を「予想」しつつコミュニケーションを取り交わしている限り、人と人とが理解し合うことなど不可能なことなのではないか。

frag. 3

It seems impossible for two people to fully come to understand each other as long as each person continually tries to predict the other's emotions and reactions during their

communication.

社会学の用語に「ダブル・コンティンジェンシー (double contingency)」というものがある。いわく、「二重の、または交互的な関係が、相互作用の当事者間に成立し、一方の行為者の行為のありようは、相手の行為者の反応のいかに相応しあっている事態をさす。一方の行為者の行為が可能になるためには、他方の行為者がどう反応するかを前もって知る必要があることが、互いにあてはまるのだから、一種の行為の不確定状況が現出する」³⁾ とのことである。

断章3には、この「ダブル・コンティンジェンシー」と通底するものがあるように思う。もちろん断章3には「ダブル・コンティンジェンシー」ほどの深みはない。だがそれにしても、そんな学術用語についてまったく無知である受講生の中に、「ダブル・コンティンジェンシー」と似たようなことを思い浮かべる諸兄姉がいたことは興味深い。彼（女）らの考えたことは、ざっと以下のようなものになるだろう。

「自分がこう出たら、恐らく相手はそれをこう解釈し、このような反応をしてくるのではないか。だから、こうした予想をもとに行動を起こそう。ただ、その予想はあくまでも予想であって確定した条件ではないから、予想が外れたときのオプションとして別の行動を起こすことも考慮しておかなければならない。その場合には相手はこう解釈し、このような反応をしてくと予想されるのであるが、これもまた予想であって確定ではないから…（以下、無限ループ）。これは単なる腹の探り合いであって、どうみても人と人とのコミュニケーションというものとはほど遠いのではないか…。ここに、第三者から見た相手の心の裡を組み入れれば、それでもう、いわゆる「ダブル・コンティンジェンシー」の完成だ。

社会的には、「このダブル・コンティンジェンシーをいかにしてのり切れるのかが社会的行為の原問題」であり、「パーソンズは、相互作用の同時者の双方が、共通の文化を受け入れ、それに応じて互いに行為をすることによって、この不確定状況から脱出しようとした」⁴⁾ とのことである。パーソンズ (Parsons, T.) に異を唱えるつもりなどないし、自分とは違う文化的背景を持った人とコミュニケーションをとる場合には、コトバを運用する規則や価値観といったものが共有されている方がはるかに有用であると思う。しかし、コミュニケーション論の受講者には、留学生や（当該の学校からすれば）地方出身者もいるにはいたが、その大多数は「異文化」というほど大げさな文化の違いを意識しなくてもよかったはずの人たちである。そのような彼（女）らが、パーソンズのあげる解決策でこの状況を乗り切れるとは、どうも思えない。一方、ルーマン (Luhmann, N.) は、「ダブル・コンティンジェンシーのもとでの自他の行為の未決定性が自他の相互作用の母胎であることを指摘した」とのことである。「自己決定がどんなに偶然に行なわれたとしても、相手から見れば情報としての価値を有しており、まさにこのことを手がかりとして相互作用が開始される」⁵⁾ とする。どうも要するにこういうことらしい。コミュニケーションとは「こう来たら必ずこう受けねばならない」という、ある絶対的な規則にもとづいたやりとりではなくて、他でもあり得たはずのオプションの中から偶発的 (contingent) に選ばれた行為のやりとりである、と。相手の心の裡については自分が予想するしかなく、それについては相手も事情は同様である。ここで、この自分

と相手との二重の不確実性は、コミュニケーションの妨げというよりも、その存在によってむしろコミュニケーションを促進するものとして機能する、と。些か雑駁な解釈ではあるかもしれないが、こんなところでどうだろう。

断章2と同様、断章3もやや悲観的コミュニケーションにもとづいているように思えるが、断章3のような感想を思い浮かべる受講者に対しては、このルーマンによる「ダブル・コンティンジェンシー」を紹介することで、むしろそのような感想や直感は、自分と他者とのコミュニケーションを促進し、相互の理解をより深める契機となるのだという、いかにも教員らしい助言をすることができる。まことにありがたいことである。パーソンズとルーマンに感謝しなければならない。言うまでもなく、社会学はコミュニケーション論にとって重要な関連領域である。しかし巷間、巨匠ランクに位置づけられる学者の高説であっても、社会学の学説が実生活に役立つことなど殆ど無いなどという誤解(?)がまかり通っているようだ。これは、そんなことはないということのささやかな証左でもある。

断章 4

「伝えられた」ということが確認可能なのは、いやより正確にいうならば、「おそらく伝わったはずである」ということを確信できるのは、「記号の外形」についてのみであって、「記号の意味」についてではない。

frag. 4

It is difficult for an individual to confirm whether or not an idea was properly communicated—or more precisely, to confirm an idea which should have been communicated has been indeed properly passed. Although the passing of words is easily confirmed through external senses, it is impossible to determine intrinsic qualities of communication.

物理的な音やパタンとしてのコトバそれ自体が、相手の心の裡にどのような心的反応を引き起こすのかということについては、何度も繰り返すようだが、確かめる術がない。20年近くも前のことになるが、拙稿においてその点について述べたこともある⁶⁾。そしてこれは、なにも学術論文などと肩肘張った体裁をとらなくても、林間学校などで児童・生徒たちの間で取り交わされる議論の頻出テーマではないのか。ドイッチャー (Deutscher, G.) の著作に、こんな一節がある。

十代のころ、友人と夜更けまで「哲学」談義をしたときにまさる興奮は、いくつ歳を重ねてもまず経験できない。このにきび面形而上学の談義から得られた洞察のなかでもとりわけショッキングなのは、自分以外の人に色が本当のところどう見えているのかを知ることではできない、と気づかされることではなかろうか。このリングは「緑」で、もうひとつは「赤」だとふたりの意見が一致したとしても、相手が「赤」だといっているときに実際に感じているのは、私が「緑」だというときに感じているのと同じ感覚かもしれないし、その逆もありうる。この世の終わりまで話しあっても決着はつかないだろう。もし私の緑と赤の感覚が相手のそれと間逆だっ

たとしても、色について言葉で話しあっているかぎり、ふたりの意見はすべて一致するだろうからである。⁷⁾

そしてこの種の談義は、幼く拙い話として片付けられるようなものではないそうで、実は現代科学はいまだにこの問題に明快な答を出せていないそうである⁸⁾。

とはいえ、実際には断章1でも触れておいたとおり、自分が感じ、考えたことを、相手も同じように感じ、考えているはずだということを、かなり高い公算で信じることができなければ、通常の社会生活が成立しなくなってしまう。確かに、疑いの余地なくそのことを確信することは人間には不可能なことであるかもしれないが、その点は担保して私たちはコミュニケーションをとり交わす。ただし、である。「それを言っちゃあ、おしまいよ」という、身も蓋もない話ではあるのだが、突き詰めて考えてしまうと、そこでとり交わされているメッセージについて、確かに相手に伝わっているはずである、共有できているはずであると信じられるのは、メッセージの意味内容ではなく、物理的な音やパタンとしてのメッセージそれ自体でしかないのである。

断章 5

情報、コトバが「伝わって」いるということと、それが「理解」されているということは、イコールではない。

frag. 5

The passing of words between two individuals is not equivalent to two people coming to an understanding of the meaning embedded in the words themselves.

断章 6

人間は「認め合う」ことはできても、「理解し合う」ことはできない。

frag. 6

Although humans can come to an agreement with each other, we will never be able to fully understand one another.

これらはいずれも断章4のヴァリエーションである。人間のコミュニケーションであれば、コトバそれ自体としての音やパタン、その他の物理的な情報については、確かに伝わっているはずであるということに高い信憑性を持つことはできるだろう。種としてのヒト同士であれば、生理学的・生物学的条件に即した、ある程度まで普遍的な「世界」の受け取り方があるはずだという信念が持てない限り、他の個体とコミュニケーションをとり交わしたいという意図すらおきないはずだからだ。ただし、どこまで突き詰めても、少なくとも今のところそれは、かなり高い確率でそう信じることができるという段階に留まるものではあるが…。それでも、自分の「世界」は自分自身だけのものであって、他の誰とも一切共有できるものはないと本気で信じている人がいたとしたら、それは度し難い唯我論者と言えるだろう。

では一方、その物理的情報が相手の心の裡にどのような反応を引き起こしているのかということについては、既に何度も繰り返してきた通り、それほどには強い確信を持つことはできない。自分自身も、自分の「内言」を形作っている母言語を「外」から後天的に取り込んできたのにも関わらず、である。これについては、拙稿「コミュニケーション論講義（１）」⁹⁾でも簡単に触れておいた。

さて、これまであげた断章を振り返ると、つい人と人とのコミュニケーションというものについて、以下のような定義を下してみたい。

当事（参与）者の間に物理的に共有される何らかのものがあつたとき、それに対する反応を巡って彼（女）らの間で取り交わされる調整行動。「物理的に共有される何らかのものがあつた」場合というのは、文字通り「そこに在る」という意味で、例えば参与者の一方が表出した表情やジェスチャーなど、当人が直接感知できないものも含まれる。また「物理的に共有される何らかのもの」について、高い確率でその意味・意図が予想できるものと、そうではないものがある。さらに、そもそも意味・意図など存在しないものから、参与者がある意味・意図を読み取ってしまうこともある。

一般的な理解では、断章１において取り上げたハーバーマスのようなコミュニケーション観、つまり、ごく簡単に言い換えてしまうと「コミュニケーションとは広い意味での言語を使って、相手と理解し合いたいという目的で人と人との間にとり交わされる行為」であるというコミュニケーション観は、私たちが日常的にコミュニケーションという語を使用する際に託している意味領域からすると、どうにも狭すぎるように思う。もちろん、専門用語として「コミュニケーション的行為」に厳密な定義を下しておきたいというハーバーマスの意図は理解できる。ただ私たちが「コミュニケーション」であると理解するものには、「伝え手に伝達の意図があるもの」だけではなく、「伝え手に伝達の意図がないもの」まで含まれている場合も少なくない。さらに前者は、「伝え手の本来の意図を伝えることを企図したメッセージ」と、「伝え手の本来の意図を偽装することを企図したメッセージ」とに分けることができる。また後者については、「伝え手の意図が、当人の意に反して図らずも露呈してしまったメッセージ」と、「伝え手の意図とはまったく無関係なメッセージ」とに分けることができる。そしてそのようなメッセージを受け手が解釈するヴァリエーションにも、「伝え手の意図した通りにメッセージが解釈される場合」、「伝え手の思惑とはまったく異なったものとしてメッセージが解釈される場合」、そして「メッセージが意図的または非意図的に看過されてしまう場合」とがある。このような条件の下で人と人とのコミュニケーションをとり交わそうというとき、私たちにできることは、「物理的な情報については、それが差し障りなくやり取りされているはずだという信念を担保にして、心的な情報については、理解し合うという僥倖に巡り会う奇跡が起きるかもしれないことを信じつつも、その共有については過分に期待することなく、ただコミュニケーションのもう一方の当事者である相手の存在を認めること」だけなのかもしれない。理解しあっている

ことを確認することはできなかったとしても、コミュニケーションの相手という、自分以外のもう一つの「個」の存在を認めることはできるのだから…。

断章 7

他人に理解してもらえるほど「深い」ものを、私が自らの裡に抱えているとは思えない…。

frag. 7

I doubt there is anything so “deep” within myself for others to understand.

ここまで振り返ってみると、まるで人と人とのコミュニケーションというものが私たちの生活に立ちはだかる大きな難問でもあるかのような調子だが、なんのことはない、実際には日々の生活において私たちは、特に戸惑うこともなくコミュニケーションの問題をやり過ぎて生きていけている。理屈がわからなくても実践していることなど、現代の生活においてはそれこそ山ほど起こっている。パーソナル・コンピュータやスマートフォンなどの利用、もっと言えば自転車に乗ることや、ただそこにあって呼吸をして生きていることですら、その理屈を理解して実践しているわけではない。

それに、そもそも私たちは、あえて他者と共有しなければならないほど深奥であったり、重要であったりするものを自らの裡に抱えているものなのだろうか。また仮に、人と人とのコミュニケーションとは実は単なる形式的・儀式的な手続きをやり取りしているに過ぎなくて、そこにはメッセージの伝達や共有など存在していないのだとしたら、あるのは各自が随意的に解釈した「誤解」のやり取りだけなののだとしたら、どうであろう。いくらなんでもそれは極論に過ぎるだろうが、人と人とのコミュニケーションというものに必要以上に期待を抱いたり、過大視したりすることはないのかもしれないという一種の現実逃避的（?）、厭世的な気分になる受講生に対して、それは間違っていると決めつけることも、どこか筆者には気が引けるのである。

断章 8

感情にはそれぞれ名前がついているが、それは自分の「今、この気持ち」を正確に反映したものなのだろうか？

frag. 8

Although there are words to feelings (happiness, jealousy, anger), do those words accurately reflect how I feel at a point in time?

断章 9

自分でも自分の気持ちがわからない…。わかるのは食欲などの、ごく生理的欲求のみ…。

frag. 9

We can never know exactly how we feel, the only feelings that we can be certain about are primary physical feelings such as hunger and thirst.

断章5、6でも触れておいたとおり、コトバそれ自体としての音やパタン、その他の物理的な情報が相手の心の裡にどのような反応を引き起こしているのかということについては、確かめる手段がない。そもそも自分自身も、自分の「内言」を形作っている母言語を「外」から後天的に取り込んできたのにも関わらず、である。他のどの言語でもあり得たはずの自分自身の「内なる言語」は、たまたま言語獲得期に自分の周囲を取り巻いていた環境でその言語が使用されていたことに由来する。しかし私たちは、ひとたびある特定の言語を獲得し、その言語によって自意識をつくりあげてしまったら、もうその言語で感じ、考えることしかできなくなってしまう。だから、カップ焼きソバの湯切りに失敗して熱湯に触れてしまった時は「熱ッ！」などと、家具の角に足の小指をぶつけてしまった時には「痛ッ！」などと、いちいち考えることなく反射的にそう叫ぶ。

そう、この「足の小指」という表現で思い出したことがある。アメリカ人、カナダ人、ヴィエトナム人、そして日本人である筆者からなるグループで酒席を共にしていた時のこと。使われていた言語は英語である。ヴィエトナム人が「先日、足の指（foot finger）をぶつけて痛い思いをした」という話をしたとき、アメリカ人とカナダ人がゲラゲラと笑って、「おいおい、足の指はないだろう？」と茶々を入れてきた。彼らが「なあ、おい？」と筆者に同意を求めてきたので、拙い英語で「いや、日本語でも〈足の指〉という表現が普通だよ」と返しておいた。すると、英語の語学教員であるはずの彼らにすら、にわかには事情が飲み込めない様子だった。英語の“finger”と“toe”という別々の語が指し示すものを、日本語（と、おそらくヴィエトナム語）では「指」という一つの語で指し示すという事情を、である。

その程度のことであれば、「言語・文化によって、世界の弁別の仕方が異なる。概念の範疇が異なる」という言語相対説を理解しておけば、すぐに解決することである。問題は、確かに理屈の上ではそうなのであるが、他のどんな言語でもあり得たはずの選択の中からたまたま選ばれたある特定の言語を、ひとたび自分が母言語として内面化してしまうと、もはやそれ以外の選択は自分にとって「不自然」にしか感じられないということである。もちろん日本語話者である筆者も、英語の“finger” “thumb” と “toe” という語が指し示しているものが別個のものであることは理解できる。日本語による概念化が唯一絶対の方法ではなく、世界にはそれ以外のやり方で世界を弁別する言語があるということも理解している。それでもやはり、これらを総称して「指」と表現することが筆者にはもっともしっくりとくるのである。それは、言語を運用する能力は別としても、そもそも「外」であったある特定の言語を自分の「内」に取り込んでしまったら、もはやその「外」は「私」という存在と分ち難く結び付いて、自身の器官であるかのように一体化してしまうということである。逆に言えば、それほど人間というものは社会的な生物なのだとも言えるのだろうか。

すると次のような疑念がわいてくる。それは、「私は今、母言語である日本語で感じ、考えており、そこになんの違和感も感じていない。しかし、この感覚や思考は〈日本語〉という条件（枠組み）に影響を受けたものなのであろうか。もっと強い表現を使えば、私の感覚や思考は〈日本語〉という言語に拘束されたものなのであろうか」というものである。このようなことを疑うようになると、喜怒哀楽といった基本的な感情ですら覚束なくなってくるのではないか。喜怒哀楽といった

基本的な感情は、顔の表情などと並んで、おそらくかなり普遍性の高いものなのであると考えられるが、ではどのような場面や状況においてであれば、ある感情を抱いたり、表情を出したりすることが適切であるのかという点については、言語・文化の影響を強く受けるからである。だから、私が今ここで抱いている、たとえば「愛おしい」「憎らしい」などといった感情は、言語・文化的な条件の影響下でそのように感じさせられているのではなく、本当に自発的に自身の裡から湧き出た気持ちなのだろうかということが、どうにも確信できなくなってくることもある。そのどちらもが、他者に強い気持ちで執着するという点では変わりが無いように思えてくるようになる。そんなとき、それでも言語という条件の影響を受けていないであろう、疑いなく自発的な感覚は、生存に直結した生理的欲求のみになってしまうということも理解できるような気がする。まあ実際にはそんなことを思いつつも、素知らぬ顔で社会生活を送っているわけなのだが…。

断章10

そもそもコミュニケーションが成立することは「良い」ことなのだろうか？ そのために、なぜかみんな競って相手を攻撃しているように見えるのだが…？

frag. 10

Nonetheless, it seems people are becoming more aggressive to establish “good” communication without knowing whether or not communication provides a benefit to society.

直前の断章8、9において、人間は極めて社会性の高い生物であるとした。人間が他の個体と共同して作業にあたろうと意図し、他の個体に働きかけ、コトバというものを使うようになったこと。これによって、個別の知識や経験を時間と場所を越えて蓄積し、伝達することが可能となった。またコトバは、私たちを「今、ここ」という直接的な現実の拘束から解放することによって、私たちに「今、ここ」にはない目標を設定することを可能にした。コトバの使用はさらに、自らが直接体験したわけではない他者の経験に対して共感を覚えたり、感情移入したりすることなども可能にした。つまり、コトバの使用が「自然」から「文明」へのドライブとなり、「文化」の形成と伝承を可能にしたということである。このように、人間のコトバによるコミュニケーションが、今も相変わらず脆くて弱い一つの個としての人間に、個人の処理能力を遥かに超えた知識と経験の共有を可能にしたこと、また当面の課題に対しても協同して取り組むことを可能にしたこと、このことが果たして人間にとって本当の意味での幸福をもたらしたのかという点については是非もあろうが、少なくともこれまで大きな成果をあげてきたことだけは間違いない。一個の人間では到底不可能なことが、時間と場所とを超越して複数の人間の知識や経験と結びつくことで可能になったこと。これが人間のコミュニケーションの一つの結実である。

ところが一方で、私たちのコミュニケーションが、一応は同じルールを共有したプレイヤー同士で競われる「闘技」にしか見えないこともままある。そのようなコミュニケーションにおいては、参加者にとってもはやメッセージの意味内容よりも、そのメッセージがもたらす効果にのみ重きが置かれている、あるいはメッセージの意味が「効果」と同義にすらなっているように見える場合も

ある。要するに、正否は兎も角、相手を言い負かした方が勝ちというゲームのような体をなしている「コミュニケーション」である。このようなやり取りをコミュニケーションと呼んでもいいのかは措くとしても…。さらにこれを突き詰めると、「闘技」的コミュニケーションにおいてはまだ前提とされていた同じルールの共有すら考慮されない、コミュニケーションの対象をいかにコントロールするのかというプラグマティックな関心にのみ主眼が絞られた「戦争」としてのコミュニケーションに移行してしまう。この間の事情については、拙稿¹⁰⁾でも論じたことがある。いずれにしても、そのような類いのコミュニケーションが、コミュニケーション論受講者の学生諸姉にとって、決して美しいものとは映っていないことは確かなようだ。

以上、10の断章について概観してきた。既にさまざまところで触れてきたことであるが、人と人とがコミュニケーションを取り交わしているという事実がはるか彼方の昔から所与の前提となっている段階、つまり現在の私たちがおかれている状況の下で、コミュニケーションの理屈について問い質そうとすること、それは無益なことであるのかもしれない。しかしここで、私たちのコミュニケーションとコトバを、文明、科学技術の所産と対比して考えてみたい。私たちが日常的に、もはや当たり前前にそこにあるものとしてその恩恵を受けている科学技術の所産は、私たちの大部分にとっては、機能と使用法はわかっているものの、その構造についてはほとんど無知であるものである。そして通常は、そうであったとしても、私たちの生活になんの支障もきたすことはない。そのような事情は、人と人とのコミュニケーションについても同様である。しかし人と人とのコミュニケーションにおいて重要な役割を果たしてきたコトバは、「人が作り出したもの」という点では文明、科学技術の所産と同様であるが、それらを生み出すドライヴとなったという点では、後者よりもいっそう根源的なものといえる。そのようなものを、専門的な研究者だけではなく、学生諸兄姉もそこに含まれる私たち一般人（laypersons）が可能な範囲でできるかぎり理解しようとすることは、たとえ即時的にはなかったとしても、必ずや私たちにとって有意義なものとなるはずなのである。

※各断章の英文作成には、Carlton College 在学中の Hikaru Mizuno 氏の協力を得た。

- 1) 岩本一善、2008、「コミュニケーション論講義（1）」『神戸山手短期大学紀要』第51号、神戸山手短期大学刊
- 2) Habermats, J., *Theorie des Kommunikativen Handelns*. Verlag, Frankfurt/Main, 1981. [藤沢賢一郎・岩倉正博・徳永恂・平野嘉彦・山口節郎訳『コミュニケーション的行為の理論（中）』（未来社）、1986、pp22-23]
- 3) 編集代表、森岡清美・塩原勉・本間康平『新社会学辞典』（有斐閣）、佐藤勉「ダブル・コンティンジェンシー」、pp.972-973、1993
- 4) 同書。
- 5) 同書。
- 6) 岩本一善、1993、「人間コミュニケーション・プロセスに関する一考察——物理的情報と心的情報との間に

人間コミュニケーションに関する断章

ある断層について——」、『マス・コミュニケーション研究』、43号、日本マス・コミュニケーション学会

- 7) Deutscher, G., *Through the Language Glass: Why the World Looks Different in Other Languages*. Metropolitan Books (Macmillan), 2010 [棕田直子訳『言葉が違えば、世界も違って見えるわけ』(インターシフト)、2012、p272]
- 8) 同書。
- 9) 前掲書。
- 10) 岩本一善、2001、「人間コミュニケーションにおける闘争的諸様相に関する一試論」、『山手日文論攷』、第22号、神戸山手短期大学日本語・日本文化学科